

■ それぞれの人物の生き方について考えてみましょう。そして、それに対する自分の考えをまとめてみましょう。



物語の読みを広げる

- 周囲の人物が、中心となる人物にどのような生きようをあたえたか。
- それらの人物のものの見方や考え方から、物語が伝えようとしていることは何か。

【参考例】

太一にとっておとうは、だれにももぐれない瀬にもぐれる自まんの父であり、村一番の漁師としてのほこれる父であり、自分も父のような漁師になりたいとあこがれの存在であったと思う。その父の「海のめぐみだからなあ。」という言葉は、海で生きる自分たちにとって、海と共に生きていくための大事な教えであると思う。そんな父が、なぜ瀬の主を前にして戦おうとしたのだろうか。

瀬の主は、ただ大きいだけでなく、青い宝石のような目、ひとみは黒いしんじゅ、えらを動かすたびに水が動き、岩そのもののように見え、太一がもりをつき出しても動こうとしないような、どうどうとしたクエで、まさに魚以上の存在だ。そんな瀬の主を見た父は、「海のめぐみ」として瀬の主立ち向かったのではなく、この大きな魚をたおしたいという「自分のため」に立ち向かっていったのではないだろうか。だから、命を落としてしまったのだ。太一も父と同じように、瀬の主に対しては、おとうのかたきをうちたいという「自分のため」にもぐっていたと思う。

でも、瀬の主に出会った太一は殺さなかった。父の「海のめぐみだから」、与吉じいさの「千びきに一びき」の教えが、瀬の主と出会ったとき太一の心に広がったからだと思う。その瞬間、太一は本当の意味で一人前になったのではないだろうか。自分勝手では海と共に生きることにはできない。自分もおとうも瀬の主も、みな海の命であると気がついたから、その後も村一番の漁師であり続けることができたのだと思う。